

報 告

第 36 回合同シンポジウムに参加して 「住」と「人」未来へのネットワークにむけて

兵庫頸髄損傷者連絡会 島本 卓

1. はじめに

私が車椅子で第 2 の人生を歩むことになったのは、平成 18 年 12 月の交通事故が原因でした。頸髄を損傷した当時の自分を振り返れば「絶望」の思い出しかありませんでした。

2015 年は新しいことへのチャレンジを目標に、第 4 回合同シンポジウムに実行委員とパネリストとして参加し、良いスタートを切ることができました。受傷してから 9 年目の今、まさか自分がこのような情報発信をする場にいるとは考えもしておらず、とても照れ臭くも感じられました。

2. 求められるニーズ

住環境整備は、重度障害者が社会参加するために必要とされるものです。シンポジウムでは、様々な分野で活躍されている方から、自身の経験や取り組みについてのお話を聞くことができました。私が印象深かったのは、パネリストの 1 人が「工事をする際に自分の思いが形にならなかった」ことを話すと、会場の専門家から「自分の思いを言葉だけで伝えるのは難しく、文章や箇条書きにして伝えるほうが良い。」と話されていたことでした。簡単なことですが自分では思いもつかなかった方法を知ることができました。

シンポジウム会場におられた専門家の経験や意見はたくさんの方が知りたい内容だと思います。また、ユーザーの立場でも、自分の思いや考えを声にすることにより、点と点だったものを線で結ぶことができるようになるんだと思うと楽しくなりました。誰かが「家は 3 回建てないと理想の家にならない」と仰っていましたが、まさしく人にとっての「住」は永

遠のテーマなのかもしれません。1 回で理想が完成したり、双方の思いや考えが完璧につながれば良いのですが、実際には上手くいきません。見たり使ったりして意見交換できる環境が整えられれば、ユーザーの「選択肢」も広がっていくのだと思います。「住」への意識が高まる今、障害者を中心としたネットワークづくりが必要とされています。

3. 今感じる

私が在宅生活を始めた頃のバリアフリーのイメージは「特別」な感じがしていました。もし頸髄損傷になっていなければバリアフリーは必要にならなかったのかもしれませんが。最初から「バリアフリー」、「ユニバーサルデザイン」の家に住んでいたとしたら、特別に感じることはなかったのでしょうか。新しく建てる建物にはバリアフリーがスタンダードだと言える時代が来ることを強く望みます。

4. 和のバリアフリー

私は大工職人の家に生まれましたが、大工の道には進みませんでした。それでも強く感じるのは日本の「住」へのこだわりとデザインや技術の凄さです。私が「住」に興味があるのも、200 年という古い木造で、大きな柱を特徴とする茅葺き屋根の家に実際に住んでいるからです。さすがに今は、空調設備や段差解消等の手は加えていますが、和へのこだわりは持ち続けていきたいと思っています。

今回、このような貴重な経験をさせていただき、これからの自分の役割、進むべき道を見つけることができたと感じています。これをどう活かしていくかは「私次第」であると考えれば、あえてここで「住環境の電波塔」になるんだと宣言しておき、「福祉住環境コーディネーター」の資格にチャレンジしてみようと考えています。

兵庫頸髄損傷者連絡会

〒 676-0812 兵庫県高砂市中筋 5-18-17 (自宅)